【25】

氏名（本籍）	白井 伊津子（石川県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第 1,982 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	**方法としての枕詞** －枕詞の継承と展開－

主　査	筑波大学教授		芳賀紀雄
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副　査	筑波大学教授		井坂敬子
副　査	筑波大学教授		犬井善壽
副　査	筑波大学教授		向嶋成美
副　査	筑波大学助教授		井濃内典子

論文の内容の要旨

本論文は，枕詞について，枕詞と被枕詞（枕詞のかかってゆく語）との関係の在り方を論じて新たな分類を試み，その上で，『萬葉集』から，平安朝の主として『古今和歌集』に至るまでの，枕詞の通時的な展開を跡づけた研究である。構成は以下の通り。

序論　枕詞と被枕詞の関係，付図（1）（2）
第一章　方法としての枕詞の出発－人麻呂における枕詞の方法－
第二章　方法の継承と反省－萬葉第三期の歌人における枕詞の表現－
第三章　方法の極－家持における枕詞の方法－
第四章　枕詞の行方－平安朝における枕詞の変容－
終章　修辞論としての枕詞

序章では，ある一つの語句を枕詞と認定するか否かについての，枕詞にかかわる本質的な問題を，先行研究を踏まえつつ論じ，著者の立場を明確にしている。すなわち，著者は，枕詞の認定に関しては，他の形式との差異（序詞及び修飾語との差異）が問題となり，解釈に揺れが生じている研究状況を指摘し，それゆえ，枕詞と被枕詞の関係の在り方を改めて捉え直すことが必要不可欠であることを説く。

著者の，枕詞と被枕詞の関係についての把握の要点は，第一に，ひとつの枕詞と被枕詞の関係の中で，意味と音のふたつの契機が，表裏的な交渉を持つこと。ただし，枕詞と被枕詞の関係の基本は，あくまで意味関係であり，意味の契機において，両者の意味的な有縁性と，その両者の持つ，歌の主意に対するいわば「異文脈」の性質（枕詞と被枕詞の文脈と，歌の主意の文脈との異質性）とは，密接な相関性を有するということ。第二は，その異質性を度合いとしてはかった場合，異なり具合を，文脈の遠さ・近さとして位置づけしうるということ。つまり，近さは有縁性の濃さの顕在として示され，序詞や形容句への接近を意味し，反面，同音を繰り返すことによって連接する例は，文脈の上で遠ざかり，そこでの有縁性は薄く，意味的にはほとんど無縁と見做されるということである。第三に，意味関係においては，体言を被枕詞として連体関係となる場合と，用言を被枕詞として連用関係となる場合があり，そのいずれにおいても，被枕詞が，懸詞を介さずに枕詞と直接に意味関係を持つ場合は，一次（直接）的な関係であり，懸詞を介して関係を持つ場合は，二次（間接）的な関係となるということ。

従って，著者は，意味を契機とする枕詞と被枕詞の関係については，基本的に事実上の包含関係を越えて質的に等価であるもの，ないしは事柄の言い換えの関係として理解しうることを明確にしたことになる。そして，以上の関係の把握に基づくことによって，枕詞の通時的な展開が明らかになるはずだと見通している。

第一章では，序論で考察した意味と形式の観点から，歌における修辞としての枕詞の方法が，『萬葉集』のいわゆる第二期の柿本人麻呂において確立されたことを論ずる。著者は，元来伝承や生活の場を拠り所としていた枕詞と被枕詞の有縁関係を，人麻呂が，ことばの多義性を分析し，多義性の持つ効果を積極的に枕詞と被枕詞の関係に用いることによって，新たな有縁関係の可能性を切り開いたことを強調し，人麻呂の位置を明確化している。

続く第二章では，『萬葉集』第三期に入ると，枕詞の使用率（ある歌人の作品を句数に換算し，枕詞の，その句数に占める率）が人麻呂に比して下がり，しかも，単なる措辞的な例が増加してくる傾向を指摘しつつ，一方で，なお人麻呂の方法を踏襲し，歌の文脈に関わるような枕詞を新たに案出する例も存することを重視する。とりわけ坂上郎女の場合，対句の構成・和の歌・枕詞の意図的な組み替えにその工夫が窺えることを論じ，さらに，坂上郎女には，序詞的な表象性を帯びた枕詞の使用も見受けられ，このような枕詞の積み重ねがあってこそ，はじめて大伴家持の表象性を喚起する枕詞の方法が可能になったと，その展開を捉える。

その把握の上で，従来，閑却されていた『萬葉集』第四期の大伴家持の枕詞の表現について考察を加えたのが第三章である。家持の作品においては，枕詞そのものに，序詞の持つ表象性を喚起させるに至っていること，枕詞自体が被枕詞の持つ意味をも内包するという提喩的な用法が見られることを指摘し，方法としての枕詞の極の様相を明らかにしている。

第四章では，平安朝にくだって，歌学書に見られる「異名」が，家持の提喩的な枕詞の延長上に位置すること，固定的な枕詞と被枕詞の関係が，「古事」「古歌詞」といった伝統的なことば・慣用句として理解されていること，枕詞の懸詞・縁語との併用が，序詞の表現と質的な差がないことを，いずれも，枕詞が歌語として変容してゆく過程として位置づけている。

なお，終論では，序論から第四章までの論述を要約しつつ，上述の，方法としての枕詞の成立から，その継承と展開にかかわる問題が，枕詞のみにとどまらず修辞全般にわたる問題へと及ぶこと，そしてそれらを複合的に扱う主語主体（作者）の，歌の表現に対する意識の過程を掘り下げることに通ずるということを述べて結びとしている。

審査の結果の要旨

本論文が，序論において，枕詞と被枕詞の関係の在り方を新たな観点から捉え直したことは，きわめて有効であった。両者の関係を付図（１）（２）という体裁で図式化しえたことによって，その有効性は，動きしがたいものとして高く評価される。なお，著者は，この序論の前提として，枕詞の本質が，称辞的修飾であると捉える立場からすれば，枕詞によって讃められる側のことば，すなわち被枕詞の方に着目すべきと考え，その被枕詞を見出しとする新たな索引を作成し，「上代被枕詞索引稿」と題して公表した。その索引は，古代の文献を網羅し，なおかつ今後の枕詞の研究に資するべく，可能な限り広い範囲にわたって枕詞・被枕詞の例を採択しようと試みたもので，日本古代文学の研究者に広く利用されている。

著者は，その上に立って，枕詞の通時的な展開を明らかにしており，論述はその分重みを加えていると言えよう。『萬葉集』第二期の柿本人麻呂が，枕詞と被枕詞の関係を，作歌に際しての一つの表現方法として意識し，とりわけ両者の関係に有縁性の重きを置いて新たな例を創出していったと論ずる第一章，また，その柿本人麻呂の方法を継承しつつ，枕詞と被枕詞の関係において，有縁性よりも，むしろ枕詞そのものに表象性を喚起せしめる方法を意識的に用いた，『萬葉集』第四期の大伴家持を論ずる第三章は，中国文学の表現の摂取といった面を

も視野に収めて，説得力に富むものとなりえている。

さらに，『萬葉集』から『古今和歌集』を主とする王朝和歌に至る枕詞の展開を通時的に把握しようとした意欲的な試みもまた，現在のところ踏み込んだ研究に乏しいだけに十分に評価される。

本論文が，上述のような高い研究水準を示していることは事実だが，柿本人麻呂から大伴家持へという展開，換言すれば枕詞における有縁性から表象性へという展開の中で，いわばその橋渡しとなるべき，『萬葉集』第三期の歌人の枕詞についての論述が手薄な印象は否めない。また『萬葉集』から『古今和歌集』を主とする王朝和歌への枕詞の展開について，『歌経標式』以下の歌論書をも取り上げて包括的に論じようとしているが，『古今和歌集』所収歌をはじめとする実際の作品と，歌論書における論とが，いかなるかかわりを持つかといった点については，十分に論じ尽くされてはいない憾みがある。さらに，枕詞における中国文学の表現の摂取，『歌経標式』における中国の文学論書の利用などについて，中国文学についての理解がなお届かない点があり，ここにも課題を残した。

とはいえ，本論文における枕詞と被枕詞の関係分類の試みと，その上に立った枕詞の通時的な把握，なかんずく柿本人麻呂と大伴家持を位置づける論述は，今後の枕詞の研究に大きな影響を与えてやまないものと判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。